Aルート《JR備中高松駅》

蛙ヶ鼻築堤跡
（国指定史跡）

G-2

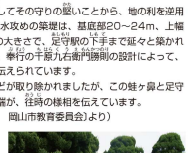
・天正10年（1582年）に羽柴秀吉は、備中高松城を攻めましたが、城は典型的な沼城で、地の利を生かして不利の守りの堅いことから、地の利を逆用して水攻めに転じました。水攻めの築堤は、基底部20～24m、上幅10～12m、高さ7～8mの大きさで、足守駅の下手まで延々と築かれたといわれています。堤は、奉行の千石九右衛門勝則の設計によって、わずか十数日で完成したと伝えられています。

築堤は、現在ではほとんどが取り除かれましたが、この蛙ヶ鼻と足守駅下手に遺存する東西の両端が、往時の様相を伝えています。

（現地解説板（平成元年3月　岡山市教育委員会））より）

自刃の跡

F-3



・妙玄寺の一角に、清水宗治が自刃した場所があり、その場所に供養塔が建立されています。妙玄寺は、高松城行所の旗本花房氏の菩提寺でした。

天正10年（1582）6月4日に「浮き世をば　今こそ渡れ　武士の名を高松の　苔に残して」と辞世を詠じて自刃した、高松城主清水宗治の至誠を後世に伝え、両軍の死者の霊を供養し慰め、供養塔が建立されています。

（現地解説板・岡山市の歴史のあるき（岡山市遺跡調査団編集、昭和52年3月）より）

高松城址公園

F-3

・現在、本丸跡に宗治の首塚といわれる墓石が、土盛りの上に立っています。宗治自刃の後、秀吉は首実検をしたうえで、近くの持宝院へ手あつく葬り、この戦いに結末をつけました。明治になって、骨つぼは地元の人によって、本丸の現在地に移され、さらに昭和32年これを整理して、コンクリート製の墓室にあらためて納めました。つぼの中には、宗治の頭髪骨のほかに、割れた素焼きのさかずき片三個と、三つにわかれた短刀があって、発掘に立ちあった人たちに大きな感動をあたえました。本丸の南約50mの道路沿いに、二の丸跡、さらにその南東の砂支谷の位置に三の丸がありました。高松城は、周囲が沼地だったので、城への入口には、舟を並べて橋をかけたり（舟橋）、押し出し式の橋をつくっていました。なお、本丸跡の現地形が前方後円墳で古墳の地形を利用して築城されたものとする説がありましたが、最近の発掘調査の結果、古墳だったという見方は薄らいだようです。

天正10年（1582年）、高松落城後は、宇喜多の重臣花房正成が高松城主として支配した時代があります。正成は、のち高松知行所請負人となった花房職之の一族で、宇喜多直家父子に仕え、高松城攻略にも参加しています。彼は高松城南面から鼓山ふもとを流れる板倉川をせきとめることを考えたと伝えられています。戦の後、6000石を加増されて高松城主となっています。のちの宇喜多家のうちやもめに戸川氏とともにかかわって、正成も岡山をより、益田長盛にあずけられました。正成が高松城主であった頃、城郭整備工事を行っていたことが最近の発掘調査によって判明し、基礎工事用の杭石が発見され、その中には石仏や五輪塔などもまじっています。正成以後は廃城となっています。

この城跡は、吉備史跡県立自然公園の一角を占めており、本丸跡と水攻め築堤跡は国指定史跡ともなっており、歴史を学びながらうるおいと憩いのある歴史公園として市民に親しまれています。

（岡山市の歴史のあるき（岡山市遺跡調査団編集、昭和52年3月）・岡山市景観賞遊歩道調査報告書（岡山市文化的都市づくりチーム編集、昭和59年3月）・高松城址公園資料（岡山市・高松城址保興会事務局）より）

首塚

F-3

・高松城主清水宗治の首塚です。明治43年（1910）石井山持宝院境内より、本丸跡に移転しました。

記録によると秀吉首実検の後、持宝院境内に一基の墓を建て手厚く葬ると記してあります。移転当時の記録によると、瓶（亀山焼）の中には懐刀の二つにおれたもの、無数の骨片、素焼きの酒器を見ることができます。盛土の上の五輪塔前部に一体、後部に二体の地蔵尊が刻まれています。前部が宗治公・後部の二体は片清入道と未詳武士です。

（歴史探索ウォーク（足守文所資料、平成10年8月）より）

高松城水攻め水取入口遺跡

C-5

・天正10年（1582）頃の高松城付近の地形は、東と北に山を背負い、南は高梁川東流の後を残した自然堤防があって少し高く、西は足守川に向かって少しずつ高くなっており、ちょうど扇り鉢状の形をしていたように思われます。そうして、城の周りは深い沼で囲まれた要害堅固な城でした。太閤記に「数月を送りて打ち囲み攻め候も、力攻めなど思い絶えたる要害なり」とあります。秀吉は力攻めでは不可能とみて軍議の結果、黒田官兵衛の献策した水攻めを決行することに決めました。早速築堤工事に取り掛かり、わずか12日間で完成したと言い伝えられています。折からの大雨、足守川上合橋付近を堰止めて堤の中に流れ込ませたと伝えられています。築堤工事奉行は、宇喜多家の家臣千石九右衛門といわれ、足守川堰止め工事奉行は、吉田六郎太夫長利（高松城物語）とあります。ちなみに、江戸時代郷土の地理学者であり歴史学者でもあった吉川古松軒は、寛政3年（1791）絵図に、「この大堤防の痕跡は無く蛙ヶ鼻付近を堰止めている。」としています。

（「高松地区地域振興事業　まほろばの里「高松」歴史と花の見える風景事業完成式」（高松地区地域振興事業実行委員会）資料より）

Aルート《JR足守駅》

Bルート《JR足守駅》

冠山城跡

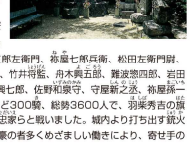
C-9

・天正10年（1582）4月17日冠山城は、織田勢2万、宇喜多勢1万に囲まれ、足守の山や谷は陣馬で埋まりました。守りは城主本三郎左衛門、祢屋七郎兵衛、松田左衛門尉、高越左兵衛、三村三郎兵衛、竹井将監、舟木貴五郎、難波惣四郎、岩田多郎兵衛、権叡和尚、祢屋興七郎、佐野和泉守、守屋新之丞、祢屋孫一郎、庄九郎、秋山新四郎など300騎、総勢3600人で、羽柴秀吉の旗本杉原七郎左衛門、宇喜多忠家らと戦いました。城内より打ち出す鉄火はは付けしく、また城兵には悪の者多くめざましい働きにより、寄せ手の損枝は大きく、一時攻めあぐみました。4月25日不幸にして城内より出火し、燃え拡がり城中大混乱となりました。城主林三郎左衛門は最早これまでと城兵に別れを告げ自決しました。竹井将監、高越左兵衛、秋山新四郎、舟木興五郎、難波惣四郎、権叡和尚など将兵139名は自刃或いは討死を遂げました。戦史には、加藤清正一番乗りの巧妙話、荒武者竹井将監が加藤清正と激闘ののち戦死したことなど激戦の状況が詳しく伝えられています。小山などから難攻の冠山城をついに落城しました。林三郎左衛門ほか在り51歳、備中国を中国与えようという羽柴秀吉の誘いも断わり、毛利並びに小早川隆景に義を貫きました。

（現地解説板（昭和58年11月吉日　冠山城址400年記念事業奉賛会））より）

八幡宮の石鳥居
（国指定文化財）

C-9

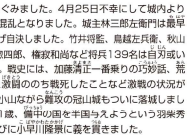


・葦守八幡宮の鳥居は女会の宮鳥の大鳥居と同様に、明神鳥居の柱の基部に袴見柱を伴う両部の鳥居であり、石鳥居のこの形式のものはめずらしいものです。花崗岩製で、高さ4.3m、柱の間隔は3.4mです。柱が太く、低目ずんに見える時代的特徴を示しています。向かって右側の柱の内側に「鎮宮元年10月2日藤主神主貞陽重人（中臣）、大工沙弥妙阿（右）、沙弥僧覚道（左）」の銘款があり、1361年（南北朝時代）の造立と判明しています。大工の「妙阿」はこの鳥居より15年前に建立された鼓神社宝塔（国指定重要文化財・上高田所在）の石大工と同一人物であり注目されています。この鳥居は、在銘の石鳥居としては、最古の部類にはいり、この時代のほぼ完全な姿を伝える全国的にも貴重なものです。

（現地解説板（昭和63年3月　岡山市教育委員会））より）

葦守八幡宮

C-10



・足守藩の総鎮守で、祭神は応神天皇ほか。「日本書記」に、応神天皇の立杏地（行宮）として「葉田の葦守宮」があったと、注目されています。神社は、そこまで遡るとは思えませんが、平安時代末の「足守荘絵図」には、前身らしい八幡社が描かれています。既国時代には別の山に移されたとも伝わりますが、宝永3年（1706）には、ここで本殿の建設が行われています。その本殿は幕末に焼け、明治3年（1867）に再建、現在に至っています。御神体の青銅鏡（木瀬神真奇神鏡）は、慶長12年（1607）作、足守藩主の木下家が寄進したもので、岡山県重要文化財に指定されています。また、社殿絵画の中に「足守荘絵図」の写しがあります。実物は、京都の神護寺蔵の国宝。足守荘は、在地豪族の賀陽氏によって運営されていたものが、平安時代に院、さらに神護寺に寄進されたもので、南北朝時代に至っています。絵図は嘉応元年（1169）作成で、荘園の範囲や地割り、寺や集落の配置が細かく描かれています。足守の地は、この絵図の実体を伝える寄進地荒荘園の遺構として、全国的に注目されています。

（現地解説板（平成4年3月　岡山市教育委員会））より）

旧足守商家
藤田千年治邸

B-10

・この「旧足守商家　藤田千年治邸」は、所有者の御協力をいただき、醤油の醸造場所などに一部手を加えたほかは、岡山市が当時の姿に近い形で平成2年度に改修を行いました。この建物は、江戸時代末期に建てられてたもので、明治時代に現在のような本瓦葺き、入母屋2階建て、壁は漆喰塗りの蔵は土造りとなりました。この足守地区にはこのような造りの建物が多く見られ、足守陣屋町として当時大変賑わっていたことを物語っています。

さて、初代藤田千年治氏（明治期）が醤油製造販売を始められ、第二代藤田千年治の代（第二次大戦後頃）まで続けられ、足守はもとより、総社方面にまで大八車に醤油樽を乗せて小売りや配達に出かけていたということで、そのような話を伺っていると、当時のたいへんのどかな風景が目の前に浮かんできます。（現地解説板より）

足守プラザ

B-10

・格子窓にしっくいの壁、瓦屋根という、陣屋町のたたずまいが町並みに溶け込む、新しい情報発信と文化交流、そしてやすらぎの場、足守プラザ。レストランや土産店、情報コーナーのある表棟、木工芸と陶芸を体験できる工房棟、多目的ギャラリーと展示室を備えた米蔵ギャラリー、そして広々とした中庭では足守を訪れた人たちが、思い思いにやすらぎと交流のひとときを過ごせます。足守だけでなく、新しい古備路観光、岡山観光の拠点として、親しまれています。

（休館日：月曜（祝日の場合は翌日）、年末年始）

（こころの原風景　足守（岡山市観光物産課　平成9年9月）より）

備中足守まちなみ館

B-10

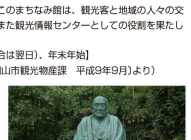
・もとこの地にあった商家で、駐在所や郵便局として利用されていました。構造材の痛みがはげしく改修によって保存は無理とあって、抜本的に改築かはどこされ、このまちなみ館ができ上がりました。もちろん設計は、かつての姿を踏襲し、周囲の歴史的環境への調和も配慮しています。巧みに組み合わされた屋根面の造形が印象的で、格子窓、二階の虫籠窓、生子壁などがかつての商家の雰囲気を再現しています。このまちなみ館は、観光客と地域の人々の交流と憩いの場として、また観光情報センターとしての役割を果たしています。

（休館日：月曜（祝日の場合は翌日）、年末年始）

（こころの原風景　足守（岡山市観光物産課　平成9年9月）より）

緒方洪庵生誕地

C-11



・緒方洪庵（1810～1863年）は、江戸時代後期の蘭学者、教育者。文化7年（1810）、備中足守藩士佐伯惟因の三男として、この地で生まれました。15歳の時、大阪の蘭学医、中天（天游）の門に入って蘭学をはじめ、文政13年（1830）、江戸に下り坪井信道の蘭学塾に入りました。また、天保7年（1836）には長崎に遊学し、オランダ商館長らから医学や西洋事情について学びました。洪庵29歳の時、医業の傍ら蘭塾「適塾跡 塾（適塾）」を大阪に開き、福沢諭吉、大村益次郎、佐野常民、橋本左内ら多くの門弟を育てました。

また、洪庵はオランダ人によって伝えられた種痘に成功しました。そして、嘉永3年（1850）には足守藩主木下利恭の招きに応じて、足守の除痘館で種痘を施しました。治療を含めてその数500人に及んだと伝えられています。緒方洪庵には「扶氏経験遺訓」や「病学通論」など翻訳、著述が多数あり、近代医学への貢献は計り知れません。この生家跡は、指定面積686m²、中央に顕彰碑が建っています。この顕彰碑下には洪庵の胴の緒、元服の時の遺髪が埋められているということです。

（現地解説板（平成9年10月　岡山市教育委員会））より）

旧足守藩侍屋敷遺構
（岡山県指定重要文化財）

B-11

・この遺構は、江戸時代中期ごろの武家屋敷で長屋門、母屋、御成門、内蔵、土蔵などがそろい、ほぼ完全な形態で残っており、県下で唯一の貴重なものです。この邸は、足守藩の家老職のもので、長屋門を入ると、正面に大きな母屋が東北に面して建ち、裏手に離れ内蔵と湯殿があり、母屋の南に土蔵があります。母屋は寄棟造・茅葺・総瓦の平屋建です。正面に唐破風をもった威厳のある玄関があり、式台をあがると、上床つきの八畳、右に折れて13畳（二の間）の広間、その上手に6畳（一の間）の座敷があります。これだけが表向き（公式用）の書院に属し、一の間には床と付書院を設け、付書院には右頭窓を開きます。二の間との境に珍しい蔀窓組欄間を入れ、天井はすべて平綴天井、外側に縁をめぐらした貴族ならではの格式のある礼儀正しい構造です。私生活に使う奥向きには、6畳の間、3畳、2畳、7.5畳が配置され、7.5畳の間は当主の居間で、2畳（仏間）は、武士の家には必ず設けた一室です。書院の前には遠州流と伝えられる庭があり、御成門は藩主の来邸のとき使用しました。長屋門には右手に茶室、左手に中間部屋がつくられています。この遺構は昭和48年4月、所有者の寄付を受け、岡山市が保存修理事業を行いました。

（現地解説板（昭和50年6月　岡山市教育委員会））より）

近水園
（岡山県指定名勝）

B-11

・旧足守藩主木下家の庭園として江戸時代の中頃までに作庭された池泉回遊式の庭園で、昭和34年に岡山県の名勝に指定されました。足守藩は、2万5千石の小藩ですが、宮路山の南麓に陣屋・会所などの藩の中枢施設とともに大名庭園としての、この近水園が配されています。

本園は池を中心として随素な設計がなされています。池には鶴島・亀島が浮かべています。亀島には、亀頭石、中心石、腰石、亀尾石などが、その名のとおり配されています。池に面して建つ吟風閣は、6代目の藩主斉定が安永5年（1708）、京都御所（仙洞御所）を模倣した時に、その残材をもって建てたといわれます。数奇屋造りのたたずまいが、水面に影を落とし、情緒をそえています。

（現地解説板より）

市内最大規模の
ゲンジボタル生息地

A-14

・ここは「ホタルの里」足守です。ホタルを守り、ホタルのすめる水辺環境を保全するため、平成4年5月22日に岡山市は足守地域を「ホタルの里」に指定しました。岡山市の北西部に位置する本地域では、5月下旬から6月にかけて各地区でホタルが見られます。特に、大井トンネル下の足守川では、数千匹のホタルの乱舞が見られ、市内一のホタルの発生地になっています。これほどホタルの多く見られるということは、水清く、魚類や鳥類等の動物にもすみやすい豊かな自然に恵まれている証拠でもあります。また、地域住民のホタル保護活動も活発で、このような地元の方の理解があって、この自然が保たれていることを忘れることはできません。みなさんとともに、このホタルの里を守り、ぜひとも後世に伝えていきたいと考えます。

（現地解説板より）

Bルート《大井バス停》

矢喰神社

B-3

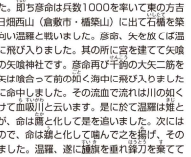
・御祭神は吉備武彦命です。後に天津宮を合祀したので、矢喰神社、又は矢喰天津宮と呼んでいます。創立年代は不詳です。吉備津宮縁起によれば、第十代崇神天皇の時、百済の王子温羅と云う者がありました。両眼が大きく、毛髪赤く、頬骨強大、身の丈抜群、その性勇悍、腕力絶大、常に仁義を守らず、日本を伺わんとする志がありました。本朝に来り、諸州を観覧する内、遂に吉備の国新山に登りました。この地方の勝れたるを見てこの所に大門を起し、城壁を築き、矢倉を立てて城郭となして居を構え、時には西国より、帝京に送る貢物を奪取しました。近里往来して人民を悩乱せしめました。時の人この城郭を鬼の城と称し恐れました。天皇勅して大吉備津彦命を派遣して之を征伐せしめられました。即ち彦命は兵数1000を率いて東の方吉備の中山に陣し、西の方は日畑西山（倉敷市・楯築山）に出て石楯を築き甲兵を引いい、鬼の城に向い温羅と戦いました。彦命、矢を放くば温羅の矢と空中に撃ち合い海中に飛び入りました。其の所に宮を建て矢喰宮と云いました。之が今日の矢喰神社です。彦命再び弓鈎の大矢二筋を番え発したところ、その一矢は喰合って前の如く海中に飛び入りました。他の一矢は温羅の左眼に命中しました。その流血で流れは川の如くでした。其のところを名づけて血吸川と云います。是に於て温羅は雉となって山中にかくれましたが、命は潰と化して歴を追いました。次には鮎と化して血吸川に入ったので、命は鯰と化して噛んで之を捕げ、その所を名付けて鯉喰宮と云いました。温羅、遂に鑪鞴を重ね鍊刀を重ねて降ったとあります。

以上は吉備津彦命にまつわる物語でこの地方に昔から語り伝えられている伝説です。いまの砂川竹の血吸石があります。

（現地解説板（高松観光協会））より）

坂吉田堂山古墳
（県指定文化財史跡）

G-4

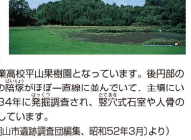


・長さ150mの前方後円墳で、県下でも大きさにおいて、5位にランクされる大古墳です。前方部が高松農業高校平山果樹園となっています。後円部の南東に続く尾根には、5基の陪塚がほぼ一直線に並んでいて、主墳にいちばん近い2号墳は、昭和34年に発掘調査され、鍛冶式石室や人骨の一部・玉・鉄器などを発見しています。

（岡山の歴史のあるき（岡山市遺跡調査団編集、昭和52年3月）より）

最上稲荷
（日本三大稲荷）

H-7



・伏見・豊川と並ぶ当山は天平勝宝4年（752）、報恩大師が当山八丈岩でご修行中に感得された「最上位最上大菩薩」が祭祀されています。孝謙・桓武両天皇の勅願で最上稲荷宮寺と称したのが中世秀吉の高松城攻めによって焼失、慶長6年（1601）年中興の祖日円聖人が

てくてくロード

岡山市には、温暖な気候に育まれた自然が多く残り、古備の国のもたらした古代の歴史的資源をはじめとする数々の歴史的、文化的遺産も多く、四季折々の風物も豊かです。しかし、車社会と呼ばれる今日では歩くことが少なくなり、これらの貴重な資源に触れる機会が減少し、歩くという健康的な活動から遠のいているようにみます。このような状況を改善するため、岡山市では環境にやさしいまちづくりを進めるー環として、ふるさと岡山をゆっくり歩き、身近な自然とのふれあいの場を提供する遊歩道の展開へ向けて「岡山市遊歩道ネットワーク（てくてくロード）」を策定しました。遊歩道ネットワークが広く市民に活用され、ふるさと意識の醸成、歴史文化財への理解、さらに健康づくりに貢献することを願っております。

ルート内の主な公共施設

JR備中高松駅	TEL086-287-8030	高松郵便局	TEL086-287-2300
中鉄バス（株）	TEL086-222-6601	岡山西警察署	TEL086-254-0110
高松地域センター	TEL086-287-3731	高松交番	TEL086-287-2053
足守地域センター	TEL086-295-1111	足守駐在所	TEL086-295-0104
高松公民館	TEL086-287-2057	大井駐在所	TEL086-295-0289
足守公民館	TEL086-295-1942		
足守図書館	TEL086-295-1942		
近水園（管理事務所）	TEL086-295-0981		
足守藩侍屋敷	TEL086-295-0983		
足守プラザ	TEL086-295-0001		
足守郵便局	TEL086-295-0300		

岡山市遊歩道ネットワーク
《てくてくロード》
高松・足守ルートマップ

第4版:2013年(平成25年)3月発行
岡山市

お問い合わせ
岡山市都市整備局道路計画課
TEL086-803-1695

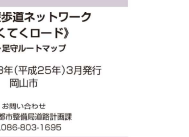
あきカン・ゴミは持ち帰りましょう

この尊像を鑪鞴され聖護を再興し、最上稲荷山妙泉寺と改称されました。それぞれ新稲の名刹として又日本三大稲荷として名高いものになりました。

（現地解説板より）

高松城水攻め鳴谷川遺跡
（岡山県指定史跡）

I-8



・中国地方の平定を目指す織田信長は、西国の雄毛利氏の攻略を羽柴秀吉に命じました。秀吉は天正10年（1582）3月に、兵力3万をもって備中に攻め入り、国境の諸城を攻略しました。備中高松だけは攻めあぐねました。このため、城の近くを流れる足守川をせき止めて水攻めにして城主清水宗治に降服を迫りました。水攻めにあたって、足守川のみだけでは不足の場合を考え、高松城の背後の山間を流れる長野川をせき止め、「なしいも」を約3m掘り下げて水を高松側に流し込もうとしました。工事は難航し、410mのうち91mを残すところで開城となりました。工事奉行は間に合わなかった責を負って自刃したといわれています。里人はこれを哀れみ塚をたてて供養しました。この塚が水車行の墓といわれています。

（現地解説板（昭和62年3月　岡山市教育委員会））より）

守福寺宝殿
（国指定重要文化財）

E-10

・この宝殿は、花崗岩製で、屋根は正面切妻・背面寄棟風に造り、正面に簡素な方柱を立て組を出した、いわゆる春日造社殿の形式にならった高床式です。全体的に素朴な造りであるが木造建築の細部構造を一部に刻み出しています。向拝の石柱に「建応元年（1338）11月22日」の銘があり、南北朝時代の造立であることがわかります。裏山に所在していたものとのことであり、宝殿内部の「足守荘絵図」には吉備寺背後の山腹に王子堂と書かれた祠が描かれ、これがこの宝殿の前身であったと考えられます。

（現地解説板（平成5年3月　岡山市教育委員会））より）

大光寺霊廟
（岡山県指定重要文化財）

A-10

・大光寺は、旧足守藩木下家の菩提寺。第三代藩主木下利治（1603～1669）が創建しました。この本堂の南側に、霊廟があります。この霊廟は、桁行3間・梁間2間の規模で、半扉入母屋造、桧瓦葺の簡素な建物です

岡山市遊歩道ネットワーク てくてくロード6

備中高松城址と陣屋町足守の歴史を訪ねる

高松・足守ルート

約14.3km

高松・足守ルートは、高松城水攻めに関する遺跡や古い石仏などが分布する「高松ゾーン」、大山道沿いの石仏や田園風景が広がる「大山道ゾーン」、陣屋町として古いまちなみが残る「足守ゾーン」、商業地として栄えた古いまちなみが残り足守川沿いに豊かな自然が広がる「大井ゾーン」の4つのゾーンに分けられます。Aルートは、高松ゾーンで距離は約5.3km です。Bルートは、大山道ゾーンから大井ゾーンで距離は約9.0km です。

大井の古いまちなみと足守川沿いの自然

大井ゾーン

足守の陣屋町の歴史とまちなみ

足守ゾーン

大山道沿いの石仏と足守荘の田園風景

大山道ゾーン

高松城水攻めや古い石仏などの備中高松の歴史

高松ゾーン

が、県下でも数少ない霊廟建築の一つとして貴重な存在となっています。霊廟の内部は敷居及び鴨居で外陣と内陣に仕切られています。その内外陣の壁奇りに蛭梁間を設けていますが、正面に蟇匹秀吉と正室ねねの霊牌をまつり、その左右に木下家歴代藩主の霊牌が配置されています。棟札などの記録がないので建築年代は不明ですが、廟内に吊された金銅製燈籠に「元禄12年（1699）炭屋美則良日」と陸刻銘があることなどから建築年代が推測され、第代藩主木下鉄定が造営したものとも想定されています。

（現地解説板（平成9年3月　岡山市教育委員会））より）

備中国足守荘
（国指定重要文化財）

B-6

・足守荘は、嘉応元年（1169）、今から約840年前につくられた荘園です。荘園とは、古代から中世にかけて、天皇や有力な貴族、勢力の強い寺社の領地を示します。足守荘は、最終的には、寿永二年（1183）に後白河法皇から京都の神護寺に寄進されました。そのため、足守荘の様子を描いた絵図（足守荘絵図）は、現在、神護寺に伝来されています。

足守荘絵図には、左の端に足守川、右の端には丘陵、中央には暴蹴目に整然と区画された条里地割の水田、水田と丘陵部の間には荘園を南北に貫く道が描かれており、この道は旧街道と重なることから、旧街道が江国の時代まで遡ることを確認することができます。ほかに、八幡神社のある八幡山、冠山城のある福岡山、周辺の水田を潤していた平刀池も描かれており、それらは現在の地形とも一致します。足守全体は、荘園の景観が極めて良好に保存されている荘園遺跡であるといえます。

（岡山市教育委員会）